

研 究

就学前児の社会的スキル発達に関連する
育児環境の特徴細川 陸也^{1,2)}, 桂 敏樹²⁾, 志澤 美保³⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、就学前の社会的スキルの発達に関連する育児環境の特徴を明らかにすることである。調査方法は、2013年、京都府内の保育所21施設、幼稚園10施設に在籍する4・5歳児の養育者1,845名に対し、育児環境に関する自記式質問紙調査を実施し、また、担任の保育士・幼稚園教諭が、児の社会的スキルを評価した。

母親から有効回答の得られた1,341名を分析対象とし、社会的スキルを目的変数として重回帰分析を実施した。その結果、父親の存在、きょうだいの存在、家庭の経済的余裕、家庭への社会的サポート、養育者の児に対する肯定的かかわり、援助的かかわり、主体性を促すかかわりは、発達と正の関連を示した。一方で、養育者の体罰を伴うかかわり、一貫性のないかかわりは、発達と負の関連を示した。

Key words : 社会的スキル, 育児環境, 養育態度, 就学前児

I. はじめに

近年、学童期の問題行動や不登校などの学校不適応の増加が深刻な問題となっており¹⁾、その背景の一つとして、就学前の社会的スキルの未発達が指摘されている。社会的スキルとは、社会適応に必要な社会性を、具体的な行動として捉えた概念である²⁾。中でも、自己表現 (assertion)、自己制御 (self-control)、協調 (cooperation) などの発達は、生涯の社会適応に影響を与えることが指摘されている^{3~7)}。また、その発達に影響する環境因子としては、養育者の日常的なかかわり、家庭への社会的サポート、家庭の経済状況、早期教育の機会、保育ケアの質などが挙げられる^{8,9)}。社会的スキルの発達はそうした環境因子に働きかけることで介入可能であり、例えば、就学

前における社会的スキル訓練 (Social Skills Training) においても、その有効性が確認されている^{10,11)}。したがって、発達の十分でない児、またそのリスクのある児に対して支援を講じることは、児の社会性の発達、ひいては生涯の社会適応に有効である。しかし、上述した社会的スキルに関する知見の多くは国外の研究成果であり、国内における発達に関連する育児環境は十分に明らかとなっていない。特に、日常的な養育者のかかわりと発達との関連の検証は、養育者のかかわりの頻度“量”またはかかわりの内容“質”のいずれかに着目した研究が多く、その両面を捉えた研究は少ない。共働き世帯の増加や父親の育児参加の増加など、社会環境の変化に伴い児へのかかわり方は量的にも質的にも変化しており、その変化は児の心理発達に影響を与えている可能性が

A Study on Child-rearing Environmental Factors Related to Social Skills Development
in Preschool-aged Children

Rikuya HOSOKAWA, Toshiki KATSURA, Miho SHIZAWA

1) 名古屋市立大学看護学部 (研究職)

2) 京都大学大学院医学研究科 (研究職)

3) 京都府立医科大学大学院保健看護学研究科 (研究職)

別刷請求先: 細川陸也 名古屋市立大学看護学部 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄 1

Tel/Fax : 052-853-8058

[2783]

受付 15.10. 7

採用 16. 4.17

ある。本研究の目的は、量および質の両面から養育者の育児を捉え、就学前の社会的スキルの発達に関連する育児環境の特徴を明らかにすることである。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は、京都府内の保育所21施設および幼稚園10施設の4・5歳児クラスに在籍する全幼児1,845名とその養育者である。協力施設は、京都府内の保育所および幼稚園の園長へ研究協力を依頼し、同意の得られた施設にて調査を実施した。発達障害・知的障害の診断または疑いのある児および、母親以外が質問紙を回答した児は、質問紙の回答内容から判断し、本分析においては除外対象とした。

2. 調査方法および調査時期

調査方法は、2013年6～8月の期間に、協力施設の保育所・幼稚園にて児の養育者に対し、育児環境に関する自記式質問紙調査を実施した。その後、回答の得られた母親の児について、担任の保育士・幼稚園教諭が、幼児用社会的スキル指標¹²⁾を用いて、児の社会的スキルを評価した。

なお、信頼性の高い評価を目指すため、評価を行う保育士・幼稚園教諭は研究者から評価方法に関する統一した説明を受け、また養育者の回答した質問紙の内容を見ることなく評価を行った。質問紙の提出・回収方法としては、質問紙には予めID番号が付番されており、養育者は質問紙を記入した後、園に設置された専用の回収箱へ提出した。その後、研究者が質問紙を回収しID番号を園へ伝え、保育士・幼稚園教諭は園で管理しているID番号の対応表を用いて対象の児を確認した。

3. 調査内容

1) 育児環境に関する調査項目

(1) 対象属性

年齢、性別、家族構成〔核家族／拡大家族、父親・きょうだいの存在〕、所属施設〔保育所・幼稚園〕について尋ねた。

(2) 経済状況

家庭の経済的余裕について、“まったくない(1)”～“かなりある(6)”の6件法で尋ねた。

(3) 育児機会および社会的サポート

本調査では、養育者が児と一緒に遊ぶ機会や食事をする機会などの、児とのかかわり頻度“かかわりの量”を、育児機会と定義した。育児機会を評価するため、育児環境指標 (Index of Child Care Environment)¹³⁻¹⁸⁾を使用した。本指標は、人的かかわり、社会的かかわり、制限や罰の回避、社会的サポートの4領域13項目からなる。本調査では、他の質問項目と内容が重複した制限や罰の回避の領域を除いた3領域11項目を、“めったにない(1)”～“ほぼ毎日(5)”の5件法で尋ね、また家庭の社会的サポートにおける育児協力者・育児相談者の存在についてはその有無を尋ねた。

(4) 育児方法

本調査では、養育者の児への褒め方や叱り方などの、児とのかかわり方“かかわりの質”を、育児方法と定義した。育児方法を評価するため、養育スキル尺度¹⁹⁾およびAlabama Parenting Questionnaire²⁰⁾などを参考に、養育者が簡易に回答可能な調査項目28項目を作成し、研究者、保育士・幼稚園教諭で検討し、内容的妥当性を確認した。各項目に対して、“全くそうでない(1)”～“いつもそうである(4)”の4件法で尋ねた。

2) 社会的スキルに関する評価項目

幼児用社会的スキル指標 (Social Skill Scale)¹²⁾を使用した。本指標は、自分の気持ちや考え、行動を適切に相手に対して表出できる「自己表現」、我慢や自制を表す「自己制御」、他の子どもに対する共感や向社会的な行動を表す「協調」の3領域30項目からなる。信頼性と妥当性が確認されており、本研究においてもクロンバック α 係数は、0.89～0.93であった。質問項目は、日常行為に関する評価項目について、“しない(0)”～“いつもする(2)”の3件法で評価し、各領域の合計点が高いほど社会的スキルが高いと評価する。

4. 分析

1) 分析対象

質問紙を配布した1,845名のうち、1,412名(回収率76.5%)から回答を得た。このうち、有効回答が得られた1,369名(有効回答率74.2%)から、除外基準の児を除いた1,341名を、本研究の分析対象とした。

2) 分析方法

分析には、統計解析ソフトSPSSver20.0 for Windowsを用い、有意水準を5%未満とした。

(1) 育児環境の特性

対象属性、育児環境の把握には、記述統計学的分析を実施し、属性ごとの社会的スキルの特性把握には、t検定を実施した。また、育児方法の因子構造の把握には、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。因子の抽出には、まず回答分布を確認し、回答が一つの選択肢に集中する項目（90%以上）、天井・床効果のみられる項目を除外とし、I-T 相関分析（Item-Total Correlation Analysis）、G-P 分析（Good-Poor Analysis）により質問項目の適切性を検証したうえで、因子分析を実施した。

(2) 育児環境と社会的スキルとの関連

育児環境と社会的スキルとの関連を検証するため、重回帰分析（強制投入法）によって、社会的スキル指標各得点（自己表現、自己制御、協調）を目的変数、育児環境の各変数を説明変数として、段階的に説明変数を投入し分析した。Model 1 では、家族構成、経済状況、Model 2 では、育児機会および社会的サポート、Model 3 では、育児方法を説明変数として投入した。最後に Model 4 では、家族構成、経済状況、育児機会および社会的サポート、育児方法の全変数を説明変数として投入した。その際、すべての Model において、先行研究で発達に影響することが確認されている性別および年齢、また、家庭外の環境因子である児の所属施設は、調整変数として投入した。

5. 倫理的配慮

本研究は、書面にて同意を得た養育者に対して実施し、個人情報保護のため、匿名化し ID 番号で管理した。また、本研究は、京都大学大学院医学研究科・医学部および医学部附属病院の医の倫理委員会において承認を得て実施した（承認日：2013年4月1日、承認番号：E 1701）。

Ⅲ. 研究結果

1. 育児環境の特性

1) 対象属性および社会的スキルの得点（表1）

性別および年齢は、男児692名（51.6%）、女児649名（48.4%）であり、4歳児680名（50.7%）、5歳児661名（49.3%）であった。家族構成は、核家族1,168名（87.1%）、母子家庭120名（8.9%）であり、所属施設は、保育所624名（46.5%）、幼稚園717名（53.5%）であった。

対象の性別および年齢と社会的スキルとの関連では、自己表現・自己制御・協調のいずれにおいても、女児が男児より、5歳児が4歳児より、社会的スキルの得点が有意に高かった。また、その他の対象の属性と社会的スキルとの関連は、自己制御では、父親のいる家庭がいない家庭より、きょうだいのいる家庭がいない家庭より、幼稚園が保育所より、児の社会的スキルの得点が有意に高かった。協調では、核家族が拡大家族より、父親のいる家庭がいない家庭より、きょうだいのいる家庭がいない家庭より、幼稚園が保育所よ

表1 対象属性および社会的スキルの得点

n = 1,341

項目		n	%	社会的スキル								
				自己表現			自己制御			協調		
				平均値	標準偏差	p	平均値	標準偏差	p	平均値	標準偏差	p
性別	男児	692	51.6	16.7	3.6	***	14.6	4.6	***	11.2	5.5	***
	女児	649	48.4	17.5	3.3		16.9	3.7		13.3	5.5	
年齢 (クラス)	4歳(年中)	680	50.7	16.6	3.7	***	14.7	4.5	***	10.8	5.4	***
	5歳(年長)	661	49.3	17.6	3.1		16.7	4.0		13.6	5.4	
家族構成	拡大家族	173	12.9	16.8	3.6	ns	15.5	4.5	ns	11.4	5.8	*
	核家族	1,168	87.1	17.1	3.5		15.7	4.3		12.3	5.5	
	父親の存在	なし	120	8.9	16.7	ns	14.5	4.5	**	10.6	5.7	**
		あり	1,221	91.1	17.1		15.8	4.3		12.4	5.5	
	きょうだいの存在	なし	300	22.4	16.9	ns	14.9	4.8	***	11.3	5.5	**
		あり	1,041	77.6	17.1		15.9	4.2		12.5	5.6	
所属施設	保育所	624	46.5	17.0	3.4	ns	15.3	4.3	**	11.6	5.3	***
	幼稚園	717	53.5	17.2	3.5		16.0	4.3		12.7	5.7	

表 2 育児機会および社会的サポート，経済状況

〔育児環境評価指標〕	めったにない n (%)	月 1 ～ 2 回 n (%)	週 1 ～ 2 回 n (%)	週 3 ～ 4 回 n (%)	ほぼ毎日 n (%)	
1. 人的かかわり						
一緒に遊ぶ機会	26 (1.9)	268 (20.0)	202 (15.1)	94 (7.0)	751 (56.0)	
本を読み聞かせる機会	191 (14.2)	265 (19.8)	362 (27.0)	224 (16.7)	299 (22.3)	
童謡や歌と一緒に歌う機会	149 (11.1)	195 (14.5)	346 (25.8)	282 (21.0)	369 (27.5)	
家族と一緒に食事をする機会	5 (0.4)	5 (0.4)	43 (3.2)	52 (3.9)	1,236 (92.2)	
配偶者が育児する機会	113 (8.4)	171 (12.8)	377 (28.1)	190 (14.2)	490 (36.5)	
2. 社会的かかわり						
一緒に買い物に行く機会	29 (2.2)	190 (14.2)	750 (55.9)	268 (20.0)	104 (7.8)	
一緒に公園に行く機会	205 (15.3)	576 (43.0)	446 (33.3)	86 (6.4)	28 (2.1)	
同年齢の子どもをもつ友人と 交流する機会	398 (29.7)	600 (44.7)	230 (17.2)	65 (4.8)	48 (3.6)	
3. 社会的サポート						
配偶者と子どもの話をする機会	45 (3.4)	62 (4.6)	119 (8.9)	209 (15.6)	906 (67.6)	
育児協力者の存在	なし	155 (11.6)				
	あり	1,186 (88.4)				
育児相談者の存在	なし	25 (1.9)				
	あり	1,316 (98.1)				
〔経済状況〕	まったくない n (%)	ない n (%)	あまりない n (%)	少しある n (%)	ある n (%)	かなりある n (%)
経済的余裕	134 (10.0)	164 (12.2)	469 (35.0)	391 (29.2)	156 (11.6)	27 (2.0)

り，児の社会的スキルの得点が有意に高かった。

2) 育児機会および社会的サポート，経済状況（表 2）

育児機会について，「めったにない」，「月 1 ～ 2 回」と回答した割合は，一緒に遊ぶ機会294名（21.9%），本を読み聞かせる機会456名（34.0%），童謡や歌と一緒に歌う機会344名（25.7%），家族と一緒に食事をする機会10名（0.7%），配偶者が育児する機会284名（21.2%），一緒に買い物に行く機会219名（16.3%），一緒に公園に行く機会781名（58.2%），同年齢の子どもをもつ友人と交流する機会998名（74.4%），配偶者と子どもの話をする機会107名（8.0%）であった。また，育児協力者，育児相談者がいないと回答した割合は，それぞれ155名（11.6%），25名（1.9%）であった。家庭の経済的余裕は，「まったくない」，「ない」と回答した割合が，298名（22.2%）であった。

3) 育児方法（表 3）

育児方法28項目について，各項目の回答分布を確認したところ，90%を超える項目はなく，天井・床効果ともなかった。I-T 相関分析では，全質問項目の総得点と各質問項目の相関係数は0.49～0.74の範囲であり，全体との一貫性を損なう質問項目はみられなかった。また，G-P 分析でも，全質問項目において上位群の平均点が低位群より有意に高値であり，各質問項目が全体と関連していることが確認できた。次に，因子分析

（最尤法，プロマックス回転）を実施し，スクリープロットや解釈可能性を検討したうえで，固有値 1 以上を基準に 5 因子を決定した。因子負荷量が0.40に満たない 9 項目を除外し，再度，因子分析を行い，その 5 因子について，“肯定的かかわり”，“援助的かかわり”，“体罰を伴うかかわり”，“一貫性のないかかわり”，“主体性を促すかかわり”と記した。クロンバック α 係数は，各因子では0.73～0.85であり，全体では0.84であった。

2. 育児環境と社会的スキルとの関連

1) 自己表現（表 4）

すべての育児環境因子を投入した Model 4 では，経済的余裕の高い家庭（標準偏回帰係数 $\beta = .087$ $p < .01$ ），育児相談者のいる家庭（ $\beta = .099$ $p < .01$ ），育児方法のうち，肯定的かかわり（ $\beta = .062$ $p < .05$ ），援助的かかわり（ $\beta = .089$ $p < .01$ ）の多い家庭の児ほど，自己表現の得点が有意に高い傾向を示した。一方で，一貫性のないかかわり（ $\beta = -.074$ $p < .01$ ）の多い家庭の児ほど，自己表現の得点が有意に低い傾向を示した。

2) 自己制御（表 5）

Model 4 では，父親のいる家庭（ $\beta = .076$ $p < .01$ ），経済的余裕が高い家庭（ $\beta = .069$ $p < .01$ ），育児協力者のいる家庭（ $\beta = .064$ $p < .05$ ），育児方法のうち主

表3 育児方法の因子パターン行列

項目	因子					平均値	標準偏差
	1	2	3	4	5		
因子 1：肯定的かかわり（ $\alpha =.85$ ）							
良いことをしたとき、何が良かったかを具体的に伝えながら褒める	.84					3.14	.62
良いことをしたとき、頑張ったことへの努力を褒める	.81					3.36	.55
良いことをしたとき、どんなに時間がなくても褒める	.77					3.17	.65
失敗したときでも、できたところまでの努力を褒める	.53					3.09	.62
良いことをしたとき、良いことをしてくれて自分も嬉しいことを伝える	.42					3.04	.61
因子 2：援助的かかわり（ $\alpha =.82$ ）							
悪いことをしたとき、相手がイヤな気持ちになることを伝える		.80				3.41	.58
悪いことをしたとき、それがなぜ悪いことなのか理由を伝える		.72				3.20	.64
失敗したとき、解決策と一緒に考える		.59				2.90	.62
失敗したとき、なぜ失敗したのかと一緒に考える		.54				2.81	.65
因子 3：体罰を伴うかかわり（ $\alpha =.80$ ）							
悪いことをしたとき、叩いて注意する			.79			2.11	.84
言うことを聞かないとき、叩いて聞かせる			.77			2.00	.78
悪いことをしたとき、怒鳴って注意する			.50			2.28	.67
因子 4：一貫性のないかかわり（ $\alpha =.73$ ）							
悪いことをしたときでも、自分の気分によって叱る程度が変わる				.75		2.76	.60
良いことをしたときでも、自分の気分によって褒める程度が変わる				.66		2.31	.75
泣き叫んで自分の要求を通そうとしたとき、つい要求をのんでしまう				.43		2.04	.63
因子 5：主体性を促すかかわり（ $\alpha =.77$ ）							
喧嘩になったときでも、子ども同士で解決するまでできるだけ見守る					.69	2.45	.83
失敗したときでも、自分なりに工夫するまでできるだけ見守る					.61	2.53	.69
悪いことをしたとき、相手がどんな気持ちになるかを自分で考えさせる					.53	3.27	.66
悪いことをしたとき、それがなぜ悪いことなのかを自分で考えさせる					.45	3.02	.70

因子抽出法：最尤法, プロマックス回転

因子間相関	1	2	3	4
2	.55	—		
3	-.31	-.25	—	
4	-.34	-.28	.50	—
5	.40	.32	-.41	-.35

因子分析によって抽出された5因子を, 因子1：肯定的かかわり, 因子2：援助的かかわり, 因子3：体罰を伴うかかわり, 因子4：一貫性のないかかわり, 因子5：主体性を促すかかわりとした。

体性を促すかかわり ($\beta=.082\ p<.01$) が多い家庭の児ほど, 自己制御の得点が有意に高い傾向を示した。一方で, 体罰を伴うかかわり ($\beta=-.106\ p<.001$) の多い家庭の児ほど, 自己制御の得点が有意に低い傾向を示した。

3) 協調 (表6)

Model 4 では, きょうだいのいる家庭 ($\beta=.066\ p<.01$), 経済的余裕が高い家庭 ($\beta=.065\ p<.05$), 育児相談者のいる家庭 ($\beta=.072\ p<.01$), 育児方法のうち援助的かかわり ($\beta=.087\ p<.001$), 主体性を促すかかわり ($\beta=.054\ p<.05$) が多い家庭ほど, 協調の得点が有意に高い傾向を示した。

IV. 考 察

1. 対象属性および育児環境

対象の児の社会的スキルの発達は, 全国の児を対象とした先行研究と近似していた¹²⁾。また, 育児機会および家庭の社会的サポートについても先行研究と近似しており^{13~18)}, 対象の特性に大きな偏りはみられなかった。育児方法については, 因子分析の結果, “肯定的かかわり”, “援助的かかわり”, “主体性を促すかかわり”, “体罰を伴うかかわり”, “一貫性のないかかわり” の19項目5因子が抽出され, クロンバック α 係数は内的整合性判断の基準の0.7を上回った。

表 4 育児環境と社会的スキル“自己表現”との関連

説明変数	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4
	β	β	β	β
[家族構成]				
父親の存在（あり =1, なし =0）	—			—
きょうだいの存在（あり =1, なし =0）	—			—
家族形態（拡大家族 =1, 核家族 =0）	—			—
[経済状況]				
経済的余裕	.101***			.087**
[育児機会] *				
同年齢の子どもをもつ友人と交流する機会		.054*		—
[社会的サポート]				
配偶者と子どもの話をする機会		—		—
育児協力者の存在（あり =1, なし =0）		—		—
育児相談者の存在（あり =1, なし =0）		.101***		.099**
[育児方法]				
肯定的かわり			.060*	.062*
援助的かわり			.077**	.089**
主体性を促すかわり			—	—
体罰を伴うかわり			—	—
一貫性のないかわり			-.071**	-.074**
Adjusted R ²	.128	.116	.119	.145

Model 1：調整変数；年齢，性別，所属施設

Model 2：調整変数；年齢，性別，所属施設

Model 3：調整変数；年齢，性別，所属施設

Model 4：調整変数；年齢，性別，所属施設

説明変数；家族構成，経済状況

説明変数；育児機会，社会的サポート

説明変数；育児方法

説明変数；家族構成，経済状況，育児機会，社会的サポート，育児方法

*育児機会は，有意差を示した変数のみ表示。

*：p<.05，**：p<.01，***：p<.001

表 5 育児環境と社会的スキル“自己制御”との関連

説明変数	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4
	β	β	β	β
[家族構成]				
父親の存在（あり =1, なし =0）	.075**			.076**
きょうだいの存在（あり =1, なし =0）	.075*			—
家族形態（拡大家族 =1, 核家族 =0）	—			—
[経済状況]				
経済的余裕	.070**			.069**
[育児機会] *				
配偶者が育児する機会		.053*		—
同年齢の子どもをもつ友人と交流する機会		.051*		—
[社会的サポート]				
配偶者と子どもの話をする機会		.055*		—
育児協力者の存在（あり =1, なし =0）		.070***		.064*
育児相談者の存在（あり =1, なし =0）		—		—
[育児方法]				
肯定的かわり			—	—
援助的かわり			—	—
主体性を促すかわり			.083**	.082**
体罰を伴うかわり			-.111***	-.106***
一貫性のないかわり			—	—
Adjusted R ²	.145	.136	.144	.170

Model 1：調整変数；年齢，性別，所属施設

Model 2：調整変数；年齢，性別，所属施設

Model 3：調整変数；年齢，性別，所属施設

Model 4：調整変数；年齢，性別，所属施設

説明変数；家族構成，経済状況

説明変数；育児機会，社会的サポート

説明変数；育児方法

説明変数；家族構成，経済状況，育児機会，社会的サポート，育児方法

*育児機会は，有意差を示した変数のみ表示。

*：p<.05，**：p<.01，***：p<.001

表6 育児環境と社会的スキル“協調”との関連

説明変数	Model 1	Model 2	Model 3	Model 4
	β	β	β	β
[家族構成]				
父親の存在 (あり =1, なし =0)	.056*			—
きょうだいの存在 (あり =1, なし =0)	.058*			.066**
家族形態 (拡大家族 =1, 核家族 =0)	—			—
[経済状況]				
経済的余裕	.057*			.065*
[育児機会] *				
童謡や歌と一緒に歌う機会		.058*		—
同年齢の子どもをもつ友人と交流する機会		.056*		—
[社会的サポート]				
配偶者と子どもの話をする機会		.069**		—
育児協力者の存在 (あり =1, なし =0)		—		—
育児相談者の存在 (あり =1, なし =0)		.070**		.072**
[育児方法]				
肯定的かかわり			—	—
援助的かかわり			.098***	.087***
主体性を促すかかわり			.069*	.054*
体罰を伴うかかわり			—	—
一貫性のないかかわり			—	—
Adjusted R ²	.130	.118	.116	.154

Model 1 : 調整変数 : 年齢, 性別, 所属施設 説明変数 : 家族構成, 経済状況
Model 2 : 調整変数 : 年齢, 性別, 所属施設 説明変数 : 育児機会, 社会的サポート
Model 3 : 調整変数 : 年齢, 性別, 所属施設 説明変数 : 育児機会, 育児方法
Model 4 : 調整変数 : 年齢, 性別, 所属施設 説明変数 : 家族構成, 経済状況, 育児機会, 社会的サポート, 育児方法
*育児機会は, 有意差を示した変数のみ表示。
* : $p<.05$, ** : $p<.01$, *** : $p<.001$

2. 社会的スキルの発達に関連する育児環境の特徴

1) 家族構成

(1) 父親の存在

父親が家庭にいる児は, いない児に比べて, 自己制御の得点が高い傾向を示した。父親のかかわりが, 児のさまざまな心理社会的発達に影響を及ぼすことは報告されており²¹⁻²³⁾, 本結果においても, 父親の存在が, 自己制御の発達に関連していることが明らかとなった。家庭における父親の存在は, 物理的, 情緒的に安定した育児環境を提供する重要な役割を担っており, また父親の育児は, 身体的かかわりが多く, そうした父親特有のかかわりは, 認知機能や問題解決能力を高めることが指摘されている^{24, 25)}。母子世帯の児は, 学校中退率や成人後の生活保護受給率が高いなど, 社会不適応のリスクが比較的高い傾向にあり^{26, 27)}, そうした背景には, 父親の不在による発達への影響も関連している可能性が考えられた。

(2) きょうだいの存在

きょうだいのいる児は, いない児に比べて, 協調の得点が高い傾向を示した。幼児期の対人関係は, 親子,

きょうだい, 友だち関係を基本としており, 各々が相補的に発達に重要な役割を果たしている。きょうだい関係は, 親子関係と友だち関係の中間にあり, 成長過程においてきょうだい関係が入ると, 家庭内から家庭外への対人関係の移行が順調に進むと報告されている²⁸⁾。きょうだいの存在が, 生涯の社会適応にまで影響するかについては, 一貫した結論は出ていないが, 本結果からも, きょうだいの存在が, 発達をより順調に促す因子となっていると考えられた。

2) 経済状況

経済的余裕の高い家庭の児ほど, 自己表現, 自己制御, 協調のすべての得点が高い傾向を示した。本研究での経済状況はあくまで主観的な経済的余裕であるが, 国内の幼児においても海外の報告と同様²⁹⁾, 家庭の経済状況が発達に関連していることが示された。経済状況が発達に影響する要因はさまざま考えられるが, その一つに, 児の受ける慢性的ストレスが挙げられる。経済状況の低い家庭では, 口論や体罰など, 家庭内の混乱による心理的ストレスを受ける機会が多く^{30, 31)}, そうした慢性的ストレスの蓄積は, ストレ

ス対処能力といった発達過程に負の影響を与える³²⁾。また、経済状況の低い家庭では、児に対し厳格過ぎたり、児との相互のかかわりが低い傾向がみられる。そのような家庭では、声掛けの機会、読み聞かせの機会が少ないなど、児が脆弱な言語環境におかれる場合が多く²⁹⁾、言語スキル、コミュニケーションスキルの発達に負の影響を与える³³⁾。近年、日本の児童の相対的貧困率は、OECD加盟国の中でも高い数値を示しており^{34, 35)}、国内の経済格差の観点からも、幼少期の発達支援の重要性が示唆された。

3) 育児機会および社会的サポート

本分析では、かかわりの量および質の両面を同時に分析したところ、かかわりの質が発達と有意な関連を示した。先行研究において、かかわりの質はさまざまな育児環境の因子の中でも発達に強く影響を及ぼすことが指摘されている⁸⁾。子育てにおいて、もちろん絶対的なかかわりの量の確保は重要であるが³⁶⁾、本結果より、共働き世帯など児と接する機会が比較的制限されてしまう家庭においても、良質なかかわりを行えば、社会性を育むことのできる可能性が示唆された。また、社会的サポートでは、サポートのある家庭の児は、サポートのない家庭の児に比べて、自己表現、自己制御、協調の得点が高い傾向を示した。社会的サポートは、さまざまな面で育児環境に影響を与えることが想定される。社会的サポートの乏しい家庭では、養育者の育児負担感や育児不安が大きく、子育ての質が低下したり、また子育て情報へのアクセスが低下する傾向がある³²⁾。昨今の核家族化や地域の繋がりへの低下といった社会背景を踏まえると、今後ますます、養育者が孤立しないような社会システムの重要性が考えられた。

4) 育児方法

育児方法では、児の努力や成果を褒めるなどの肯定的なかかわり、児と一緒に物事を考えるなどの援助的なかかわり、児が自分自身で考える機会を大切にするなどの主体性を促すかかわりは、発達と正の関連を示した。一方、体罰を伴うかかわり、一貫性のないかかわりは、発達と負の関連を示した。児が主体的に物事を考え行動する機会を促すことは、自制心をはじめとした社会性の発達に良好な影響を与えることが報告されている^{37, 38)}。一方、体罰や一貫性のない養育態度といったかかわりは、多動や他者への攻撃などといった問題行動に影響することが報告されている³⁹⁾。多忙な育児の中で、肯定的かかわり、援助的なかかわり、主体

性を促すかかわり、体罰のないかかわり、一貫性のあるかかわりといった育児を日々継続することは決して容易なことではないと思われるが、そうした児に寄り添った育児は、着実に児の発達に良好な影響を与えている可能性が示された。

3. 本研究の限界と今後の可能性

本研究の限界と今後の可能性は、次の三点である。一点目は、研究デザインが横断研究であり、因果関係の判断が困難な点である。家族構成や経済状況などの固定的な環境因子は、因果関係を推察できるが、児の特性によって影響する育児方法などは、さらに縦断的に調査する必要がある。二点目は、育児方法に関する調査項目が限定されている点である。今後、具体的な育児支援に活用していくためには、さらに多面的な育児方法を含めた調査が必要である。三点目は、研究対象が一地域である点である。本研究の対象特性に大きな偏りはみられなかったが、今後、他地域での調査によって再現性の検証や地域間比較を実施する必要がある。

V. 結 論

社会的スキルの発達に関連を示した育児環境は、父親の存在、きょうだいの存在、家庭の経済的余裕、家庭への社会的サポート、養育者の児に対する肯定的なかかわり、援助的なかかわり、主体性を促すかかわりが、発達と正の関連を示した。一方で養育者の体罰を伴うかかわり、一貫性のないかかわりは、発達と負の関連を示した。本結果より、父親の不在や困窮した経済状況、養育者の孤立といった育児環境は、幼少期の社会性の発達に負の影響を与えている可能性が示唆された。また、育児との関連では、努力や成果を褒める育児、児と一緒に物事を考える育児、主体性を大切にする育児、体罰を伴わない育児、一貫性のある養育態度といったかかわりが、社会性の発達に良好な影響を与えている可能性が考えられた。

謝 辞

ご多忙の中、本研究に快くご協力を頂きました、保護者の皆様、保育所・幼稚園の園長先生、保育士・幼稚園教諭の皆様、事務職員の皆様、自治体職員の皆様に、厚く御礼申し上げます。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 文部科学省. 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. 2014.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/16/1351936_01_1.pdf
(2016年4月22日アクセス可能)
- 2) Gresham FM. Conceptual and Definitional Issues in the Assessment of Children's Social Skills. *Journal of Clinical Child Psychology* 1986; 15: 3-15.
- 3) Caldarella P, Merrell KW. Common dimensions of social skills of children and adolescents: A taxonomy of positive behaviors. *School Psychology Review* 1997; 26: 264-278.
- 4) Gresham FM. Assessment and classification of children's social skills: A review of methods and issues. *School Psychology Review* 1984; 13: 292-301.
- 5) Ladd GW, Price JM. Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development* 1987; 58 (5): 1168-1189.
- 6) Parker JG, Asher SR. Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin* 1987; 102: 357-389.
- 7) Mischel W, Shoda Y, Peake PK. The nature of adolescent competencies predicted by preschool delay of gratification. *Journal of personality and social psychology* 1988; 54: 687-696.
- 8) Allhusen V, Belsky J, Booth C, et al. Early child care and children's development prior to school entry: Results from the NICHD study of early child care. *American Educational Research Journal* 2002; 39 (1): 133-164.
- 9) Weikart DP. Changing early childhood development through educational intervention. *Preventive Medicine* 1998; 27 (2): 233-237.
- 10) Elliott SN, Gresham FM. Social skills interventions for children. *Behavior Modification* 1993; 17 (3): 287-313.
- 11) 岡村寿代, 金山元春, 佐藤正二, 他. 幼児の集団社会的スキル訓練: 訓練前の特徴に焦点をあてた効果の検討 (実践研究). *行動療法研究* 2009; 35 (3): 233-243.
- 12) 高橋雄介, 岡田謙介, 星野崇宏, 他. 就学前児の社会的スキル コホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討. *教育心理学研究* 2008; 56 (1): 81-92.
- 13) 安梅勅江. 根拠に基づく子育て・子育てエンパワメント. 安梅勅江編. 東京: 日本小児医事出版社, 2009.
- 14) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援—よい長時間保育のみわけかた. 安梅勅江編. 東京: 勁草書房, 2004.
- 15) 安梅勅江. 保育パワーアップ講座 活用編. 安梅勅江編. 東京: 日本小児医事出版社, 2008.
- 16) Anme T, Tanaka E, Tanaka H, et al. Effectiveness of japan's extended/night child care: A five-year follow up. *Procedia-Social and Behavioral Sciences* 2010; 2 (2): 5573-5580.
- 17) Anme T, Segal UA. Implications of japan's center-based night care: A 1-year follow-up. *Early Childhood Education Journal* 2007; 35 (3): 293-299.
- 18) 渡辺多恵子, 田中笑子, 富崎悦子, 他. 夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所の支援的役割に関する考察—育児環境の実態から—. *小児保健研究* 2010; 69 (2): 329-335.
- 19) 三鈴泰代. 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究 親の養育スキルと子どもの行動傾向との関連. *Human Developmental Research* 2009; 23: 57-72.
- 20) Shelton KK, Frick PJ, Wootton J. Assessment of parenting practices in families of elementary school-age children. *Journal of Clinical Child Psychology* 1996; 25 (3): 317-329.
- 21) FIRA-CURA, Centre for Families, Work & Well-Being, University of Guelph. The effects of father involvement: An updated research summary of the evidence inventory. 2007. http://www.fira.ca/cms/documents/29/Effects_of_Father_Involvement.pdf (2016年4月22日アクセス可能)
- 22) Forehand R, Nousiainen S. Maternal and paternal parenting: Critical dimensions in adolescent functioning. *Journal of Family Psychology* 1993; 7: 213-221.
- 23) Stolz HE, Barber BK, Olsen JA. Toward disentangling fathering and mothering: An assessment of relative importance. *Journal of Marriage and Family* 2005; 67: 1076-1092.

- 24) Gottman JM. Toward a process model of men in marriage and families. In : Handbook of Parenting Volume 4 Social Conditions and Applied Parenting (ed. M. H. Bornstein). Mahwah, NJ. Lawrence Erlbaum, 1998 : 149-192.
 - 25) John AJ. Child-mother and child-father play interaction patterns with preschoolers. Early Child Development and Care 2013 ; 183 : 483-497.
 - 26) 内閣府. 若者の意識に関する調査 (高等学校中途退学者の意識に関する調査). 2011. <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/school/pdf/shiryo/2-1.pdf> (2016年4月22日アクセス可能)
 - 27) 駒村康平, 道中 隆, 丸山 桂. 被保護母子世帯における貧困の世代間連鎖と生活上の問題. 三田学会雑誌 2011 ; 103 (4) : 51-77.
 - 28) Downey DB, Condron DJ. Playing well with others in kindergarten : The benefit of siblings at home. Journal of marriage and family 2004 ; 66 (2) : 333-350.
 - 29) Bradley RH, Corwyn RF. Socioeconomic status and child development. Annual Review of Psychology 2002 ; 53 : 371-399.
 - 30) Conger RD, Donnellan MB. An interactionist perspective on the socioeconomic context of human development. Annual review of psychology 2007 ; 58 : 175-199.
 - 31) Grant KE, Compas BE, Stuhlmacher AF, et al. Stressors and child and adolescent psychopathology : Moving from markers to mechanisms of risk. Psychological Bulletin 2003 ; 129 : 447-466.
 - 32) Evans GW, Kim P. Childhood poverty, chronic stress, self-regulation, and coping. Child Development Perspectives 2013 ; 7 : 43-48.
 - 33) Evans GW. The environment of childhood poverty. The American Psychologist 2004 ; 59 (2) : 77-92.
 - 34) 厚生労働省. 平成25年国民生活基礎調査. 2013. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/03.pdf> (2016年4月22日アクセス可能)
 - 35) OECD. Growing Unequal ? Income Distribution and Poverty in OECD Countries. 2008. <http://www.oecd.org/els/soc/41527936.pdf#search=Growing+Unequal%3F+Income+Distribution+and+Poverty+in+OECD> (2016年4月22日アクセス可能)
 - 36) Waldfogel J, Han W, Brooks-Gunn J. The effects of early maternal employment on child cognitive development. Demography 2002 ; 39 (2) : 369-392.
 - 37) Bernier A, Carlson SM, Whipple N. From external regulation to self-regulation : Early parenting precursors of young childrens executive functioning. Child Development 2010 ; 81 (1) : 326-339.
 - 38) Rodriguez ML, Ayduk O, Aber JL, et al. A contextual approach to the development of Self-regulatory competencies : The role of maternal unresponsivity and toddlers' negative affect in stressful situations. Social Development 2005 ; 14 (1) : 136-157.
 - 39) Stormshak K, Bierman K, McMahon R, et al. Parenting Practices and Child Disruptive Behavior Problems in Early Elementary School. Journal of Clinical Child Psychology 2000 ; 29 (1) : 17-29.
- [Summary]
- The aim of this study was to clarify the association between child-rearing environments and development of social skills in preschool-aged children. In 2013, participants were 1,845 Japanese children aged four to five years old who were recruited from 21 nursery schools and 10 kindergarten facilities in Kyoto Prefecture. Mothers of 1,341 children completed a self-reporting questionnaire regarding their children's child-rearing environment. A childcare professional evaluated the children's social skills using the Social Skill Scale.
- Multiple regression analysis was performed using the children's social skills as dependent variables. The presence of a father, the presence of siblings, higher economic status, social support for the family, and parenting elements of "positive involvement", "supportive involvement" and "respects of independence" showed a positive association with social skill development. On the other hand, parenting elements of "corporal punishment" and "inconsistent discipline" showed a negative association with social skill development.
-
- [Key words]
- social skill, child-rearing environment, child care attitude, preschool-aged children